



# カツカツ研ニュースレター 創刊号

発行 = カツオ・かつお節研究会（カツカツ研）

発行日 = 1999年6月1日

連絡先 = 065-0028 北海道札幌市東区北28 東3-1-3-52 宮内泰介 tel&fax: 011-706-4150 miyauchi@reg.let.hokudai.ac.jp

## Contents

カツオ・かつお節研究会はひょんなことから始まった	宮内泰介	2
研究会メンバー紹介		4
カツカツ研の主な活動		7
南洋の海人と島の海人	見目佳寿子	8
大岩勇と鰹節に見る南進史の断片	藤林泰	10
作業仮説としての“ 東部インドネシアの伝統的カツオー一本釣り漁業ティドレ島起源説 ”	北窓時男	13

（上写真：脇下にカツオを抱え針をはずす。伝統的カツオー一本漁。インドネシア・モロタイ島西岸にて。撮影：北窓時男）

---

## カツオ・かつお節研究会はひょんなことから始まった

宮内泰介

---

私たちがカツオとかつお節を追いかけ始めたわけ

「カツオ・かつお節研究会」はひょんなことから始まった。

私は、家中茂さん（現カツカツ研メンバー）に「おもしろそうだよ」と教えてもらって、あまり深く考えずに、沖縄県池間島の戦前の移民たちの聞き取りを始めた。1995年のことだった。この小さな島の多くの島民が、男も女も、戦前、ミクロネシア（ポナペ、トラック）やボルネオへ移住し、カツオ漁やかつお節作りに従事していた話を聞いて、ちょっとびっくりした。戦前ミクロネシアやボルネオへ行った男たちの多くは、戦後今度はニューギニアやソロモン諸島へカツオ漁に出かけていた。日本の近代の歴史とかつお節が、沖縄の離島を巻き込む形でつながっている。これは面白そうだ。

一緒にヤシ研究会をやった藤林泰さん（現カツカツ研メンバー）に、電話で「かつお節研究会」をやりましょう、と私は言った。藤林さんの答えは意外なものだった。「僕もそれを考えていた」

ちょうど同じころ（1994年）、藤林泰さんは、ふらりと訪れた北スラウェシのピトゥン港で出会ったカツオ漁船の船長から聞いた話に触発され、かつお節に興味を覚えていたのだ。「このところ倍々ゲームだ」と語ってくれた広島県竹原市出身の船長が、8人のフィリピン人船員を使い、『きしん丸』というかつての船名を白く塗りつぶして『KISIN』と書き換えた船を操り、東インドネシア海域から枕崎まで満載のカツオをピストン輸送していた。藤林さんは、この話と、その頃急増していた「本格的カツオだし」のCMとがどこかでつながるのかも知れない、という感触をもった。

さっそく私たち2人は、「かつお節研究会」の構想を、ああでもない、こうでもない、と夢想し

ながら話し合い、頃合いを見計らって、周辺の人々に呼びかけた。

「周辺の人々」というのは、主に、故・鶴見良行さんのまわりにいた者たちである。『バナナと日本人』、『ナマコの眼』で知られる鶴見良行さんを中心に、私たちは、エビ研究会（1982～1988）、ヤシ研究会（1988～1994）という共同研究会をもった（その成果は、村井吉敬『エビと日本人』岩波新書、村井吉敬・鶴見良行編『エビの向こうにアジアが見える』学陽書房、宮内泰介『エビと食卓の現代史』同文館、鶴見良行・宮内泰介編『ヤシの実のアジア学』コモンズなどに著された）。モノを通じて日本とアジア・太平洋の関係を探ろうという関心、さらに、私たちの「海」への関心、それに日本の私たちの日常生活や文化への強い関心が、かつお節という素材へ私たちを導いた。

鶴見良行さんを中心に、私たちは、市民のための市民の研究を目指した。鶴見さんが1994年に亡くなったあと、その遺志をついで、そうした共同研究を続けたかった。ヤシ研と一緒に担った友人たちだけでなく、鶴見の周りにいて、海に関心をもっていた人たちなどに声をかけた。予想外に多くの人が集まった。

かつお節と日本の「南進」

かつお節は日本の伝統的な食材の1つである一方、江戸末期以降、「高級品」として都市を中心に大きく消費量を伸ばした商品である。それにともない、明治期以降、日本各地でかつお節の大量生産を目指した殖産興業が図られ、さらに、台湾、南洋群島（ミクロネシア）、ボルネオなどで、かつお節製造を目的とする植民活動が繰り広げられる（1938年には「南洋節」が全かつお節生産の4分の1を占めた）など、かつお節は、近代日本の

歴史の中で、多くの地域と多くの人々を巻き込んでいった。政府（中央政府、地方政府、植民地政府）、企業家、商人、漁民などさまざまな群像がかつお節をめぐってダイナミックに動いた。

戦後、かつお節消費はますます伸び、かつお削り節（そしてその小口パック）、かつお節を含んだ調味料などに裾野を広げながら、さらにその消費を伸ばしてきた。そしてそれは、生産点においては、新たなカツオ漁場の開発、さらにはカツオの開発輸入をもたらし、そして現在では、（まだ数量的には少ないが）かつお節そのものの開発輸入も始まっている。同時に、国内においては、かつお節生産地の淘汰、大手メーカーによる垂直統合化といった再編も進んでいる。

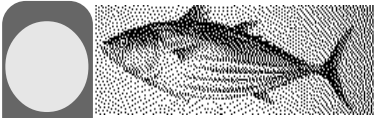
現在（1997年）、日本では年間332千トンのカツオが消費され、そのうち182千トンがかつお節になる。消費されるカツオのうち、312千トンは「国内生産」だが、その大部分は、日本の近海ではなく、赤道近くで獲れたものである。インドネ

シアやソロモン諸島、フィリピンを始めとする輸入も63千トンあり（一方「輸出」が43千トンあり）、また、かつお節の輸入も2.5千トンあり、その数は年々増加している。回遊するカツオをめぐってヒトもめぐる。かつおは自らの力でフィリピン沖から三陸まで回遊しているが、それとは別の近代的なルートで、インドネシア近海から人間の手によって日本へも「回遊」してくるのである。私たちは、かつお節生産、そしてその原料生産であるカツオ漁を調べることを通じて、私たちの日常生活の向こう側に広がる世界を探してみたいと考えた。空間的な広がりだけでなく、歴史的な広がりも重視し、近代日本の歴史でかつお節がもった意味、それが今日の構造にどうつながっているかを考えたい。それは私たちがその上に立っている生産・消費の構造を歴史的に問い直してみる作業でもある。

（みやうち・たいすけ）（北海道大学文学部）

カツカツ研の研究対象（今後変わる可能性があります）

1. 日本におけるカツオ漁・かつお節生産の歴史	対象 = カツオ漁の歴史、カツオ・かつお節消費の歴史 問題群 = かつお節が全国を席卷した社会経済的意味。行政のかつお節製造振興策の背景。多様なだし文化とかつお節との競合。
2. カツオ漁・かつお節に見る日本の南進	対象 = 南洋群島（パラオ、トラック、ポナペ）、台湾、北ボルネオ（シアミル島）、尖閣諸島 方法 = 資料調査および体験者聞き取り調査 問題群 = 日本の南進政策とかつお節、移民の生活史
3. 太平洋島嶼部における漁業開発と住民	対象 = キリバス、フィジー、ソロモン諸島におけるカツオ漁業会社（主に日系企業） 問題群 = 日本のODA（水産無償援助）の問題、合併事業の問題、漁業資源、乗組員の問題（混乗問題）、労働者、ジェンダー、文化と開発、沿岸漁業との競合
4. インドネシアにおけるカツオ漁・かつお節生産	対象 = スラウェシ島、パチャン島、ハルマヘラ島、モロタイ島、アンボン島、セラム島他 方法 = 現地調査 問題群 = 漁具・漁法の変化・伝播（日本からの一本釣り漁法の伝播を含む）、生産組織・流通機構の変化、輸出産業化と地域の変化、かつお節生産の台頭と問題点、住民とカツオ・かつお節・なまり節
5. モルディブにおけるカツオ漁・かつお節生産	対象 = その歴史と現在。歴史においては東南アジアのカツオ漁とのつながり、現在においては日本向けかつお節生産に焦点を当てる。 方法 = 現地調査および文献資料調査
6. 日本におけるカツオ漁・かつお節生産の現状	対象 = 焼津、愛媛、鹿児島（枕崎、山川）、沖縄、など 問題群 = 地場産業としてのカツオ漁・かつお節生産。産地間競争。大手メーカーによる垂直統合化。かつお節削りの渡り職人の生活史。削り器の盛衰。かつお節生産の伸びと需要の多様化（かつお節普及の意味。消費者の動向と企業戦略。花かつお、かつお節エキス）の台頭と普及。日本の資源収奪型食文化）



# カツオ & 鰹節

## カツカツ研の活動エリア



## メンバー紹介

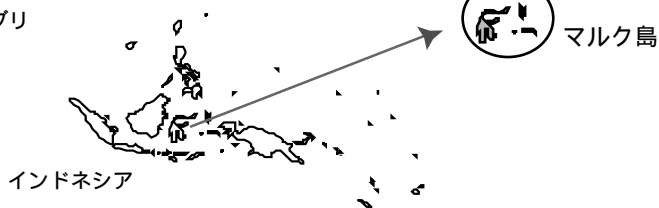
### 阿良田麻里子

総合研究大学院大学博士課程在学。  
大阪府茨木市在住。(3月下旬以降は  
インドネシア西ジャワ州)  
テーマは「インドネシアの食生活の中  
のカツオ」  
調査対象地域：  
インドネシア  
自己PR：

同じインドネシアでも、ジャワやスマトラの庶民はあまり馴染みのないカツオですが、スラウェシやマルクでは普段の食生活の中にカツオを取り入れていたことを知り、親しみを感じます。当地のフツーの生活の中でのカツオのあり方とその変化を見たいと思っています。

好きなもの：  
食べること、だらだらごろごろすること、猫と遊ぶこと

嫌いなもの：  
コーラをはじめとする炭酸飲料、ゴミブリ



### 北窓時男

国際農林水産業研究センター 水産部  
(科学技術特別研究員)在籍。茨城県つくば市在住。  
テーマは「日本とインド洋をつなぐカツオ」  
調査対象地：  
インドネシア、モルディブ  
自己PR

海域東南アジアにのめりこんで、はや20年近くなりました。独身時代を過ごした我が青春のダグパン(北部ルソン)家族で暮らしたジャカルタと思い出は尽きません。今は、スラウェシとマルクに通っています。独りよがりでない歩きたいものだと思っています。

好きなもの：  
寝ること、ボーとすること  
嫌いなもの：  
寒いこと、ヘビ

スラウェシ島



マルク島

### 赤嶺 淳

地域研究企画交流センター在籍。大阪府吹田市在住。テーマは「カツオにみるフィリピンにおける水産業政策とその実態」

調査対象地域：  
フィリピン  
自己PR：

フィリピン南部のサンボアンガとジェネラルサントスを中心に現在のフィリピンにおける水産業の実態をまとめてみたいとおもいます。輸出指向のカツオに限らず、地元で消費されるアジイワシ類、干魚についても眼をくばりたいと思います。

好きなもの：線香を焚くこと、ナマコ  
嫌いなもの：？



フィリピン

### 鈴木宏二

部品労連事務局長。東京都練馬区在住。テーマは「なぜ、今、インドネシアでカツオなのか？」

調査対象地：  
国内およびインドネシア  
自己PR：

職業の面ではメンバーの中でも異色の存在ですが、今回は調査のめどが立たず苦しい。現在までの研究会への貢献は、場所の提供のみ。他のメンバーのインドネシア(スラウェシ)での調査に1週間でも時間が合えば願っています。

好きなもの：  
海に関係する食べ物では、なんといっても「海苔」

嫌いなもの：  
権力や力関係を盾にする人、事

# カツオ & 鰹節



## 雀部真理

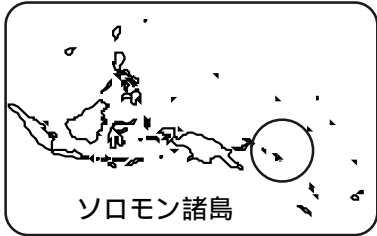
大阪YWC A在籍。大阪市内在住。  
テーマは「ジェンダー、女性（主にソロモン大洋ツナ缶工場労働者）の人権」  
調査対象地域：  
ソロモン諸島西部州  
自己PR：

1991年10月～1995年2月の間、フィジーを拠点に「太平洋地域における日本の影響」というとてつもなく壮大なテーマのもと地域内をうろろう。たまたま出会ったソロモン大洋の若い女性労働者のことが気になり、10回位訪ねました。  
好きなもの：

おいしい空気、無邪気な心

嫌いなもの：

タバコ公害、私利私欲の政治家



## 宮内泰介

北海道大学文学部助教授。北海道札幌市在住。テーマは沖縄県池間島の戦前かつお節移民の生活史、ソロモン諸島とカツオかつお節。  
調査対象地：  
沖縄県池間島、ソロモン諸島、インドネシア  
自己PR：

ここ数年、南太平洋ソロモン諸島に通い、村でぶらぶらしながら、村人の話を聞いたり、雑木林の中を歩いたりしています。また、沖縄県池間島で、戦前南洋群島やボルネオにカツオ漁かつお節生産のために移住していた人々の話を聞いています。

好きなもの：

雑木林、焼畑、コンピュータ

嫌いなもの：

会議、裏づけのない決めつけ

## 北村也寸志

兵庫県宝塚東高等学校教諭。同サッカー部監督。兵庫県西宮市高木西町(阪神大震災で震度7だったところ)  
テーマは、1)カツオ漁船と漁労技術の進歩で、カツオ漁業がどのように拡大していったか。2)カツオ節焙乾の燃料である薪(サクラ、カシなど)はどのように供給されているか。また、その森林経営の将来をみる。  
調査対象地:西日本以西、以南  
自己PR:

清水エスパルスのユニフォームの袖にあるストライプをみると、カツオの縦縞を思い浮かべてしまうので菓が、こんな僕だけかなあ。3月上旬にはテーマにそって九州へ調査旅行に出かけます。  
好きなもの:

酔った後のたこ焼き(その上には粉カツオ)横浜フリースポーツクラブ

嫌いなもの:

巨人(にきまってるやる!)、ウェルディ、神戸ゴーマニズム。

## 秋本徹

高校教員、日本アフリカ学会会員所属。神奈川県横浜市磯子区在住。テーマは「鰹一本釣りの漁業への餌屋の現状について」首都圏近郊での餌屋を訪ねる。  
調査対象地：  
三浦半島を囲む東京湾、相模湾  
自己PR：  
本当は東アフリカのカツオと鰹節について調査研究したいのですが、ソマリアからケニア、タンザニアの海域で鰹も捕れ食用とされていますが、鰹節ではありません。そこで意外なところでカツオ漁業との関係を調べてみようと思います。

好きなもの：

夏休み、椰子の葉サラサラの地域、昼寝

嫌いなもの：

喧噪、税金、消費

## 藤林 泰

埼玉大学経済学部勤務。埼玉県浦和市在住。テーマは「かつお節に見る日本と「南洋」の70年」。  
調査対象地域：  
インドネシア、パラオ、シアミル、沖縄、枕崎、山川、焼津。

自己PR：

調査過程で感じることは、かつお節を切り口にした旅からも、さまざまな人びとの生きかたに触れ、集団国家の相互干渉を知ることができ、そして、心に残る出会いがあります。

好きなもの、嫌いなもの：

いずれも、ある時は好きだったものが別の時には嫌いになったりし、その逆もあるので、特に決められません。

## 見目佳寿子

京都大学大学院人間環境学科文化人類学講座修士課程修了。京都市在住。テーマは、「沖縄の文化歴史とカツオ漁業の関係、干し魚の利用流通にみる食文化と人交流」

調査対象地域：

池間島(宮古諸島)、タイ、モルジブ

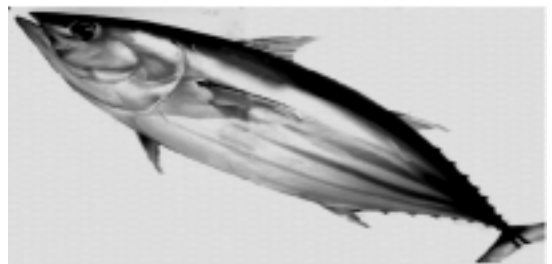
自己PR：

宮古市間の特産物の地位を黒糖と鰹節が争った時代もあると知り、現在も行われている池間のカツオ漁業と鰹節作りの実態をフィールドワークしています。地域一体となって取り組んできた鰹節産業の文化的影響を見ると地域興し可能性もつかめそうです。

好きなもの:ダイビング、旅行

嫌いなもの:

高校の数学、羽二重餅



# カツオ & 鰹節



## 家中 茂

関西学院大学大学院社会学研究科学生。テーマは (1)現在の沖縄のカツオ漁鰹節。なぜいま彼らは鰹節を作り続けるのか。(2)沖縄におけるカツオ漁鰹節の社会史 - 海外移民を軸に。(3)地場産業としての鰹節。枕崎をはじめとする本枯節生産。以上、それぞれのテーマを自分が専攻している環境社会学に結びつけて議論したいと思っています。

調査対象地域:

98年夏に、沖縄宮古・池間島、伊良部島(佐良浜) 沖縄島北部・本部(もとぶ)の3ヶ所。

自己PR: 沖縄の鰹節を生産し続けている島を訪ねました。それぞれにカツオ漁の仕方に特徴があります。池間ではカツオ船に乗せてもらいました。99年春には、小浜島(細崎)伊平屋島というかつて鰹節生産がさかんであった、八重山と沖縄北部の離島を訪ねました。近々、沖縄の鰹節発祥の地といわれる慶良間にも行ってみたいと思っています。

好きなもの:

心のこもったおいしい料理

嫌いなもの:

列に並ぶこと

## 白蓋由喜

公益法人職員、環境社会学会会員、法政大学地理学科学生。東京都目黒区在住。テーマは「鰹節製品の多様化と鰹節生産地の変遷について」

調査対象地: 日本国内

鹿児島(山川、枕崎)静岡(伊豆、焼津、御前崎)高知(土佐清水、土佐宇佐)千葉(勝浦、千倉)和歌山(那智勝浦)五島列島他

自己PR:

今、鰹節というとパック入りのことで、本家本元のはずの姿節は近所の店には見つからず、私は築地まで買いに出かけます。自分で削った鰹節は味も香りもいいのに、それが買えないなんて…。なぜ姿節は姿を消したのか? パックやだしの素は、本当に昔の鰹節と同じものなのか? 私はその疑問を解くために、今、企業や鰹節の生産地を回っています。大小さまざまな鰹節工場を見学し、お話を伺い、また、廃業した人、関連商品に移行した人に会ったり。鰹節を通して見えてくることの奥深さに驚いています。

好きなもの:

旅、疑問が解明した瞬間

嫌いなもの:

野球、タバコ、雨の日の満員電車



## 酒井 純

社団法人 食品需給研究センター研究員。東京都国立市在住。テーマは「かつお節産業と消費文化との関わり」

調査対象地域:

日本国内

自己PR:

私は食品産業や食品流通に関する調査研究を行う団体に勤めています。職場ではクライアントである行政機関や業界の立場でものを考えがち。かつかつ研では、食べる者の立場で研究できて楽しいです。

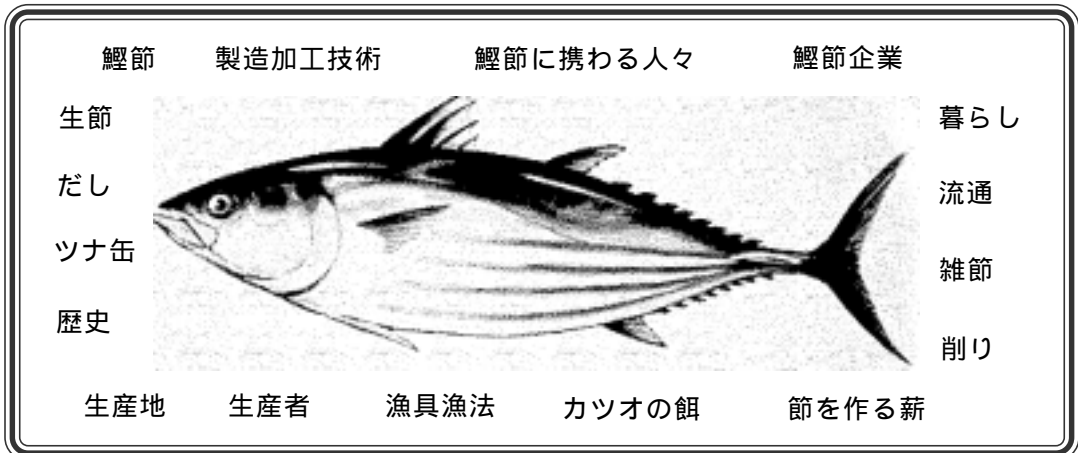
好きなもの:

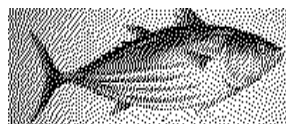
料理をすること

嫌いなもの:

締め切りに追われること

## カツカツ研の研究範囲





## カツカツ研の主な活動

- |       |            |  |
|-------|------------|--|
| 1997年 | 3月7日       | カツカツ研発足  |
|       | 4月26日      | 研究会(東京)ビデオ、レクチャー、今後の方針など   |
|       | 6月14日      | 研究会(東京)インドネシアカツオ漁、だしアンケート報告他   |
|       | 8月         | メンバー有志による東インドネシア調査旅行   |
|       | 9月13日      | 研究会(京都)キリバスのカツオ合弁会社他   |
|       | 11月28日・29日 | メンバー有志による焼津柳屋・焼津水産加工組合訪問   |
| 1998年 | 1月30～31日   | 宮下章の「鰹節」輪読会(東京)  |
|       | 4月25日      | メンバーによる報告会   |
|       | 6月12日      | メンバー有志による愛媛県伊予市ヤマキ本社訪問   |
|       | 7月24日      | メンバー有志による愛媛県伊予市マルトモ本社訪問  |
|       | 8月6日       | トヨタ財団に助成金申請  |
|       | 9月18日      | メンバー有志による埼玉県蕨市ニンベン研究室訪問  |
|       | 10月17日     | 研究会(東京)高知の鰹節事情、「にんべん」ヒアリング報告、カツオ・鰹節の生産流通規模についての統計資料をまとめ発表等メンバーによる研究発表、鰹節・生節試食会。メンバー、研究計画書を提出                 |
|       | 10月23日     | トヨタ財団研究補助金授与式  |
|       | 11月28日     | 研究会(東京)インドネシア漁業の背景とカツオ漁業の位置付けについて、スラウェシ、マルクのカツオ半加工品と食べ方について、北スラウェシのカツオ、鰹節をめぐる人と企業と家族について他メンバーによる研究発表         |
|       | 12月12日     | 外部講師を招いての勉強会。インドネシアの鰹節事情他  |
| 1999年 | 1月30日      | 研究会(東京)フィリピンの小規模漁家経営が抱える問題点について、「池間島漁民文化考-人とカツオの民俗世界-」「戦前の沖縄県池間島かつお節移民 - 移民たちのライフヒストリーを中心に」等メンバーによる研究発表      |
|       | 4月10日      | 研究会(大阪)「作業仮説としての“東部インドネシアの伝統的カツオ一本釣り漁業ティドレ起源説”」「沖縄のカツオ漁鰹節 見て歩き」「中間報告：戦前期インドネシア北スラウェシの鰹節生産と関わった人びと」等メンバーによる発表 |
|       | 6月5日       | 研究会(東京)企業と鰹節製造業者の関係、餌屋の現場他メンバーによる研究発表  |

## 南洋の海人と島の海人

見目佳寿子

沖縄の珊瑚礁が碧玉色に踊り出す初夏になると、カツオを待ち焦がれる島がある。池間島である。島の人々は、カツオを方言で「カッチュ-」と呼ぶ。まるでマンタが舞うような形をした宮古島のちょうど尾の先端部分に当たる狩俣部落から橋を渡り、池間島に入ると、そこは対岸と異なる言語・文化圏である。宮古島を臨むあたりに点々とするコンクリートの廃墟は鰹節製造場の跡である。大正末期を全盛期とした鰹節景気のころには、昼となく夜となく薫煙を上げていたであろう納屋群。真っ青な空のした、ひとり歩くものは時間が止まってしまったかのような錯覚を覚え、少し不安になる。こんな静かな島のどこかに映画館やダンスホールがあったというのだろうか。

かつての池間島は、老若男女の生活と関心の中心にカツオがあり、全面的にカツオに依存する生活であった。乏しい風土のため農業ができず一寒村に過ぎなかった池間島が宮古の村々の中で最も

早く経済発展できたために、大正時代末期頃には他島からの出稼ぎ人で溢れた。しかし、昭和初期から不況が続くと、池間の人びとも鰹節を作ったり缶詰め工場で働く等、ミクロネシアのトラック島やパラオ島で出稼ぎを始めた。戦火の拡大で引き上げるまでを第一次南洋時代とすれば、第二次南洋時代は、昭和40年代から始まった。

若い頃から船長として与那国島、尖閣列島、台湾近海でカツオを釣っていたN氏は、引退した今も名船長であったという評価が高い人物である。潜水追い込み漁によるカツオのえさ捕りの重労働のために彼はすっかり耳が遠くなってしまっているので私の質問はしばしば無視されたが、その記憶はとても正確であるように私には思われた。長時間にわたる彼のカツオ船人生の思い出話はとても感動的なものだった。

日本復帰以前、池間漁協は台湾で鰹節工場経営を始めようとしたらしい(これは失敗に終わった)。

台湾でいったいどういうルートを通じて行われたのかははっきりしないところがあるが、たくましく独自の活路を見いだそうとしていたことが伺える。その後、N氏は某水産会社に依頼されてパラオへカツオを釣りに行くことになった。当時、パラオはカツオの処女地であったようだ。宮古近海ではカツオが思うように獲れなくなったと感じていた彼は仲間と毎日毎日海から湧いてくるカツオの群れに歓



餌魚を追い込むジャヤを手にして立つ。撮影：見目佳寿子



喜の声を上げていた。南洋では、年に10か月の操業が可能であり、2か月間は島に帰って正月を過ごす。これにより大儲けをした彼は帰島すると、大きな新造船を本土に発注した。

翌年も勇んでパラオに渡航したが、どうしたとことかその年はカツオが一尾も釣れなかった。パラオ操業はすぐに打ち切れ、彼の船はパプアニュー・ギニア船団に加わることになる。ケビアン出港後すぐに、彼らは海の色が黒く盛り上がる場所を見つけた。それは何とカツオの背の色が海を黒く見せていたのである。彼の表現によれば、カツオの群れが海面から海底に達するまでをびっしり埋めつくしていたのだという。普通群れが付く流木やサメも見当たらない。少しえさを投げてみると、カツオが自ら船に飛び込んできたんだというのである。それはまさに入れ食い状態であったそうだ。後にも先にもあんなに夢中になってカツオを釣った事はない、と元船長は目を輝かせて声を強めた。ごく短時間で船にカツオを満載して他船に見つけれないように島影伝いに帰って翌朝また同じ海域に行くとカツオはやはり黒々と海面を覆っている。そして今日も楽しんでカツオで満杯になって帰ってきた。さすがに3日目には船団全体中にばれてしまった。「N漁撈長が凄い量のカツオがいるところを発見した」というニュー・スが駆けめぐり、翌日から早速彼は、他船も大漁に導いた。どうしてこうもカツオが減らないのか。カツオの群れは釣っても釣ってもなにかに引きずられるかのようにその場所にいる。不思議に思って調べると、底は曾根になっていることがわかった。底になにか魚の付くものを沈めれば流木と同じ働きをするのではないかと、島民に竹を切らせて筏様に作り椰子の葉を付けて沈めた。その結果、翌日にはカツオはもう集まっていたという。これがパプア・ニュー・ギニアにおけるパヤオ（浮き魚礁）第一号であるという。この成功をきっかけに次々とパヤオが設置された。宮古近海のカツオが少なくなったのはフィリピンに多く設置されたパヤオにカツオがとどまっているからだとは彼は主張している。そ

の後もソロモンに行くなどして実績を上げた。彼は現在、カツオ漁からはすっかり手を引いている。

南洋で成功したN氏とは対照的な人生を送ったカツオ釣り名人は池間島で今も毎日のように海に出ている。I氏は、南洋に出稼ぎした事はない。島の沖で辛い仕事をして晩には家に帰って疲れを回復できる。出稼ぎして家族が離れるのは良くない。少年のころからカツオを釣り、鰹節を製造し、島で生活をするために、島のカツオ漁を続ける事に人生を捧げてきた。カツオの来遊は減っても島人が食べる分の鰹節を絶やさず作り続ければ十分生活していける。島のおばあさんは、例え隣島であろうとよそで作られた鰹節を好まないのである。火加減で固さが違うからである。二番火まで通した生利節が程好いという。本土に出稼ぎしたりするなど金を稼ぐ方法はいくらでもあるが、伝統の味にこだわって誰かが作り続けねば島の人みんなに喜んでもらえない。また、年を取った女工さん達の職場が失われてしまう。地域環境や文化に密着した持続可能な漁業経営を目指すといったところであろうか。彼は自分の営む漁業のあり方を「考える漁業」と呼んでいる。彼に出会いその人柄に魅かれて私は池間島に通い始めたといっただけよい。広大な珊瑚礁のリ・フが広がる八重干瀬を掌を指すが如く知りつくし、先祖から引き継いだ財産として（池間島の専用漁業権というわけでない）大切に扱う彼の姿から私は強烈に学びたいと思ったのである。

I親方もN元船長も、南洋の海と池間島の海という場所は違うが、カツオ漁業においてふるさと池間を支え続けてきた人びとである。70歳になる親方が元気であるかぎり、私はこれから夏になると島の人々と同じ位カツオを待ちわびてそわそわし、シュノーケル姿で餌を追い込んだりカツオ鳥を双眼鏡で捜したりするであろう。そして、この島の将来を考えるに当たって後継者の問題や文化としてのカツオと人の民俗的かわりなどを追いかけるのは私のこれからの課題である。

（けんもく・かずこ）（京都大学大学院）

1. 大岩勇 南へ

「南へ！南へ！」という第 1 章で始まり、冷めかけていた南洋への関心を再び高めたと言われる竹越與三郎の『南国記』が出版されたのは 1910 年（明治 43 年）、大岩勇 8 歳のときである。愛知県知多半島南端に近い漁村の船大工の三男として生まれた大岩が当時話題となったこの書を手にしたかどうかはわからない。だが、1914 年（大正 3 年）のドイツ領南洋群島の占領、続いて 1919 年の委任統治領化をピークとして南洋への関心が昂揚する時代に青年期を送った大岩がその熱に突き動かされたとしても不思議ではない。



（写真）大岩勇。1940 年前後の撮影と思われる。

（Frans Wuisan 氏提供）

「大岩氏は愛知県豊浜の生れで本年 32 歳の若冠である。（中略）4 年前裸一貫で裏南洋からメナードに渡り造船所を始めたのが、事業の発端で現在は造船鉄工所の経営の外に貨物運搬業並に漁業を営んでいる。

（中略）土人との諒解が工合いよくついているから餌料に困ることはない。専属仲買があるから値良く売れる。労使が協調しているから問題が起こらぬ。自ら造船鉄工所を営んでいるから船と機械の修繕は徹底する。土地の言葉に精通しているために良民との交渉が円滑に行く。

斯様な次第であるから此地では、彼が鯉漁業に成功しなければ成功する人は恐らくあるまい。

（中略）アンボイナに於ける原耕氏は創業未だ半ばならずして、突如彼地に客死した。其の後継者として吾人は大岩君に期待を持つ」

約 3 か月に渡ってサイパン、パラオ、蘭領東印度、フィリピン、香港を視察し、メナドでは大岩にインタビューをした木下辰雄は、その報告書「南洋視察の旅」（『水産界』1933 年 10-12 月号、『海外漁業事情』南洋水産協会、1937 年所収）で、大岩勇という人物をこのように絶賛している。

鹿児島県出身の医師であり漁業家であった原耕が 3 度目の南洋カツオ漁場調査の途上、アンボンで客死したのが 1932 年（昭和 7 年）、大岩がビトゥンでカツオ漁を始めた時期に重なる。ビトゥン近海において原耕が第 1 回目のカツオ漁場調査に大成功をおさめた 1927 年の 2 年後、大岩はパラオ、テルナテを経てこの地に着き、メナドで造船所を開いている。すでに 1920 年ごろから得意の追い込み網を用いてスラウェシ周辺の沿岸で小魚を獲っていた沖縄漁民の水揚げがこの時期次第に減少していたことから、原耕の成果と大岩の資金と沖縄漁民の技術が結びついて、カツオ一本釣りを主体とした大岩漁業が発足する。

## 2. 大岩漁業の躍進と国策会社化

それまで北スラウェシにおける日本人のカツオ一本釣りは日蘭漁業（1929 年、鹿児島県人によって設立されたカツオ・マグロ漁を専門とする漁業会社）とピジャック組合（沖縄漁民の組織で、カツオ漁と鮮魚販売を手がけた）の 2 グループの手で行われていたが、ともに 1939 年（昭和 14 年）から 40 年にかけて大岩漁業に吸収合併された。これは、カツオ漁、鮮魚販売、鯉節製造を手がけ、テルナテにも基地を置くなど順調に業績を伸ばしていった大岩の経営手腕もあるが、第 2 次世界大戦開戦前夜、すでに水面下で進められていた日本軍の食糧確保のための機構整備という有無を言わさぬ力が働いたことも推測できる。事実、翌 41 年（昭和 16 年）5 月、大岩漁業も南洋貿易会社の出資の下、東印

度水産株式会社という新会社に組み込まれ、鮮魚・鯉節の海軍への納入を主たる事業とするようになる。

大岩は軍属ながら海軍大佐と同格の扱いを受け、地元日本人社会でも大きな発言力を持つ存在となっていたようだが、すでに日本の敗戦も間近に迫っていた。

事業の拡大で念願の自社船神奈川丸を手に入れた大岩は、横浜港を出港してビトゥンをめざした。だが、海軍から物資運搬を要請されたため中国を経由することになり、その途中の 1945 年 5 月 20 日、朝鮮半島釜山沖で爆撃により船は沈没し、死亡。43 歳であった。

## 3. 北スラウェシの鯉節製造の現在

戦後四半世紀を経た 1970 年ごろから再開された日本企業による鯉節製造の試みは、さまざまな企業と個人によって進められたがその多くは頓挫した。とは言え、北スラウェシ海域がカツオ漁の好漁場であることは原耕以来 70 年を経た今日も変わらず、カツオをめざす日本企業と日本人は絶えることがなかった。ようやく鯉節が比較的安定して出荷されるようになったのは 90 年代に入ってからのことである。

そして、大岩勇の足跡は思わぬ所に残されていた。現在、この地域で鯉節製造を行っている企業は 6 社（うち資金面、技術面で直接日本企業とつながりがあるのは 4 社）。地元華人資本の 2 社は姉弟が経営しており、彼らの父親がかつて大岩漁業で働いていたことが鯉節製造業を始めるきっかけになっている。

大岩には、サンギへ人（メナドの北、フィリピン・ミンダナオ島に向かって点々と連なるサンギへ諸島を中心に住む人びと）の妻との間に 5 人、華人の妻との間に 2 人の子供がいた。子や孫の中には、カツオ漁を営む者、漁船修理に従事する者、日本企業進出のの幹旋を手伝う者、日系鯉節工場で働く者など、今も鯉節とのつな

がりの中で生計を立てている者も少なくない。

1998年、6社合計の鰹節生産高は約2800トン、日本の鰹節生産量およそ7万5000トンの4%程度に過ぎないが、技術の向上、品質管理も進み、今後の生産増が見込まれている。

南への関わりは、一個人のロマンと商売っ気、抗うことのできない国家の力、それを後押しす

る社会の風潮などが絡み合いながら70年の時を越えて脈々とつながっている。

1920年代終わりから20年あまり、日本人、沖縄人、そして北スラウェシの人びとを巻き込んだカツオ・鰹節を梃子にした南進のベクトルが、今再び顕在化しつつあるようだ。

(ふじばやし・やすし)(埼玉大学経済学部)

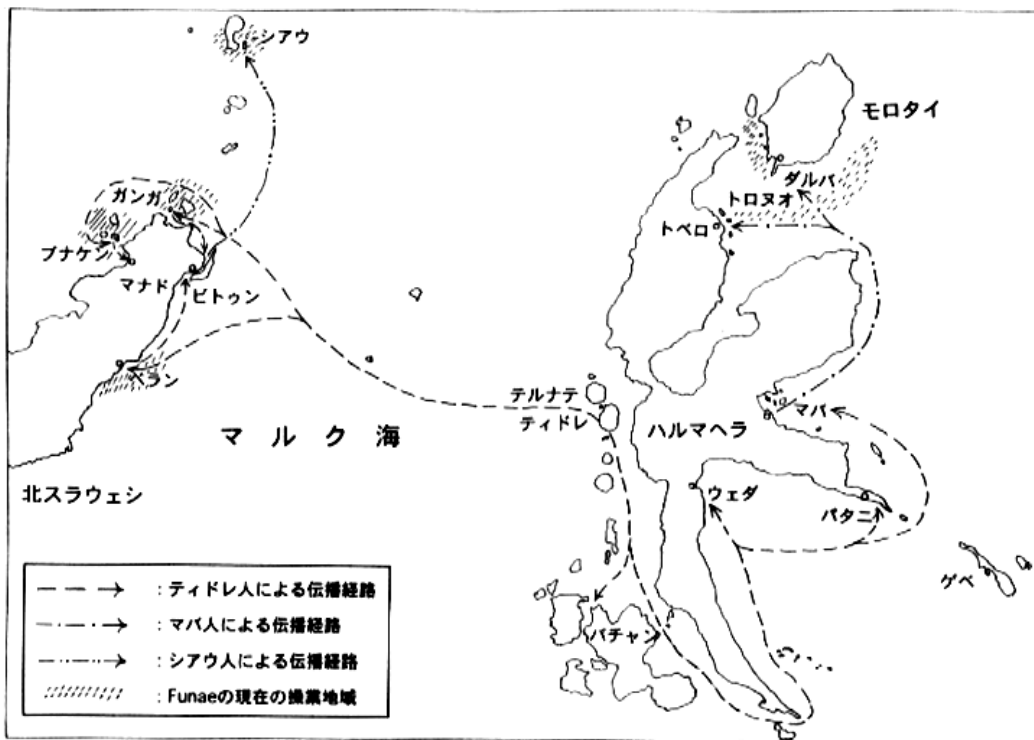


1. はじめに

この数年、東部インドネシアのマルク海周辺地域を訪ね歩いている。マルク海とは、「K」の字をした大小2つの島、つまりスラウェシ島とハルマヘラ島にはさまれた、水深数千メートルに達する深い海である。この周辺地域は、インドネシアでもっともカツオ漁業の盛んなところであり、2種類の本釣り漁業が併存している。一つは、1920年代に鹿児島県の漁業家、原耕が二隻の千代丸を率いてこの海域に出漁したことに端を発する。日本漁船の南方出漁によって、日本式の漁法が現地に定着したものでフハテ (Huhate) と呼ばれている。もう一つは、それ以前から地元漁民が行っていたフナエ (Funae) と呼ばれる伝統的カツオー一本釣り漁業である。

ここで取り扱かうのは後者のフナエである。在地漁業とされるフナエが東部インドネシアのどこで最初に用いられ、その後どのように伝播したのかを、この地域に残る伝承から組み立ててみた。仮に、東部インドネシアにおける伝統的カツオー一本釣り漁業の起源が分かれば、いくつかの共通性が認められるモルディブ、東部インドネシア、大正期までの日本のカツオー一本釣り漁業、相互の接点を絞り込むことが容易になる。また、東インドネシアにおけるカツオ漁業伝播の経緯をたどることによって、海域東南アジアにおける人々の移動と、それともなうネットワークづくりの事例研究を行なうことが可能となる。

2. マルク北部のフナエ



カツオー一本釣り(Funae)の伝承による伝播経路と現在の分布

ティドレ島ソアシオ( Soasio )にある博物館、Sonie Malige に勤めるウマル( Umar Muhammad )さんによれば、ティドレ島の伝承に基づくカツオー本釣り漁業の歴史は次のようなものである。

ティドレ島第二十代スルタンである Sultan Mutaaddirin Alal Jalal Wal Jamal Kaicil ( 通称スルタン・シャイフディン ) [ 即位年間 1657 年 ~ 1674 年 ] の時世に、スルタンが一人の重臣を呼び、国を統治するため、ティドレ島に分布する村に生業を定めた。このとき、トマロウ( Tomalou )村の生業をカツオ漁業と定め、トロア( Toloa )村の生業を造船と定めた。そのとき、カツオー本釣りや造船の技術はその村固有のものとなされ、外部へ技術を漏らすことは禁じられた。こうして、トロア村で造られた舟を用いて、トマロウ村の漁民がカツオを漁獲するという生業形態がティドレ島で成立した。

それ以前には、トマロウ村でカツオ漁業が行なわれていなかったというわけではない。村毎に生業を定めるということは、その生業分野に特化することを意味し、商業形態への漸次的移行をもたらす。つまり、地域内消費のための生産段階(つまり漁撈の段階)にあったカツオー本釣りが、商

業的カツオー本釣り漁業へと転化する契機ととらえることができる。さらに言えば、漁撈段階から商業的漁業へと移行する契機として、一本釣り旧法(少人数で疑似餌を使用する)から一本釣り新法(十数人で活餌と散水を併用する)への変化がこの時期に生じた可能性がある。新法の導入はカツオの大量漁獲を可能にし、地域外部にカツオを販売する必要性が生じるからである。

その後、ティドレ島のカツオ漁民は、カツオを求めてハルマヘラ島中南部東岸のウェダ( Weda )、パタニ( Patani )、マバ( Maba )など、旧ティドレ王国領へと漕ぎ出していった。各地に出漁したカツオ船は、その水域でカツオが獲れなくなれば、占いによって出漁地を移動した。彼等は漁獲したカツオを出漁先の村々に販売しながら、1 ~ 2 ヶ月の航海を行なったのち、家族が待つトマロウ村へと帰ってきた。帰漁時には、ティドレ島の占師に伺いをたて、次の出漁に備えてカツオ魚群の位置を知ろうとした。こうして、南方のバチャン( Bacan )やオビ( Obi )へ達する舟もあった。

ウマルさんは、こうした出漁の結果として、トベロやモロタイにカツオー本釣り漁業が伝播したから、これらの地域に一本釣り漁法を伝えたのは



生き餌を獲るソマ・コフォ漁。インドネシア・モロタイ島西岸にて。( 撮影 : 北窓時男 )

ティドレ島民だと主張する。一方、トベロの沖合いに位置するトロヌオ（Tolonuu）島の伝承は、トロヌオ島の人々にカツオ漁業を伝えたのはマバの人々だったと伝えている。トロヌオ島のカツオ漁民、アマン・ビチャラ（Aman Bicara）さんによれば、ティドレとマバとの間には行き来があり、カツオ漁業の能力において両地域は肩を並べていた。両者を比較すると、マバには舟を造る大工が多かったのに対し、ティドレの人々はカツオを釣る技能に、より習熟していたという。

カツオ漁業の中心としてのティドレ島、周縁としてのトロヌオ島という位置付けで、この伝承をとらえ直すと分かりやすい。つまり、ティドレ島からマバへ遠征していたのはトマロウ村のカツオ漁民であって、トロア村の船大工はティドレ島に留まっていたらしいこと。カツオ一本釣り漁法や漁船の建造方法などの技術は、ティドレのスルタンによって秘匿されたにも関わらず、ティドレ島のカツオ漁民が出漁したマバでは、それらの技術が普及していたこと。トロヌオ島のカツオ漁業はマバ漁民の手を介して、ティドレ島の漁業技術が伝播したのらしいことなどが、おぼろげに見える。

マバから伝播したモロタイやトベロのカツオ一本釣り漁業が、漁船の動力化など漁業の近代化を取り込みながらも、従来の操業形態を保ちつつ現存しているのに対し、マバのカツオ漁業は1970年頃を最後に消失してしまった。漁船動力化の流れに乗り切れなかったのがその一因だったという。マバとトロヌオは、現在に至るまで人々が行き来し、往来は絶えない。血縁関係にある人々もいれば、トロヌオの漁民がマバへ出漁して魚群探索することもある。しかし、現在のマバにはカツオ漁民ばかりでなく、漁民そのものがないようだ。カツオ漁業が今に残る地域とすでに消失した地域がある。その両者を分かつものの間には一体どのような事情があるのだろうか。

### 3. スラウェシ北部のフナエ

ティドレ島のトマロウ村から漕ぎ出していったカツオ船の一部は、スラウェシ島の北部を目指した。こうした漁船は航海が終わればティドレ島に帰ってきたが、乗組員の中には出漁地で船を降りて、ティドレ島に戻らない者もいた。現在、マバ、ウェダ、パタニ、バチャンなど、マルク北部にティドレ人集落はみかけないが、ガンガ（Gangga）島、ブナケン（Bunaken）島、ベラン（Belang）など、スラウェシ北部にはティドレ人集落が散在している。こうしたティドレ人集落は、カツオ漁船を降り、その地に定着したティドレ人によって形成されたという。これらのティドレ人集落では、現在もフナエによるカツオ漁業が行なわれている。

マルク北部への出漁がティドレ島から島伝いの移動だったのに対し、スラウェシ北部へはマルク海という海原を横断しなければならなかったという条件の違いがある。マバ、ウェダ、パタニなどは、当時、ティドレ王国の領地であり、日常的な交流が行なわれていた地域だから、行き来にさほどの困難はなかつたろう。一方、帆走船の時代にマルク海という360度、海しか見えない世界を走り抜けていく恐怖は計り知れなかつたろう。おそらく、北スラウェシ地方へ出漁したカツオ漁船の中には、再びティドレ島へ戻らなかつた船もあったのではないだろうか。

ティドレ島の伝承を伝えてくれた先述のウマルさんの祖父は、カツオ船に乗ってスラウェシ北部のベランへ出漁し、そこで船を降りて、その地に定住した者の一人だという。カツオ船はティドレ島に戻ってきたが、祖父はベランで結婚し、再びティドレの地を踏まなかつた。ウマルさんの氏族名はTogubuであり、ベランに定着した祖父もまた同様である。ティドレ島住民の主だった氏族名は判明しているから、スラウェシ北部に定着したティドレ人の氏族名の聞き取りと、その地で永眠した人々の墓地の年代確認によって、そうした集落とティドレ島との関係、および集落の成立年が判明するものと思われる。

一方、スラウェシ島北方沖合いに点在するサン

ギヘ・タラウド (Sangihe, Talaud) 諸島で、フナエが唯一現存している地域は、シアウ (Siau) 島とその周辺である。以下はシアウ島のサワン (Sawang) 村村長である、ヨセフ (Josep Kawoka) さんからの聞き取りである。

ヨセフさんの父親は、1940 年頃、日本人が経営するピトゥンのかつお節工場 (大岩漁業と思われる) で働いていた。当時、シアウ島の多くの人々がピトゥンのかつお節工場に働いていたという。この頃、ティドレ島から来たカツオ漁船がスラウェシ北部の海域で魚群探索を行ない、漁獲したカツオをピトゥンに水揚げしていた。当時、日本人もティドレ人からカツオ一本釣り漁法を学んだと、ヨセフさんは父親から聞いたことがある。この話は、日本式の漁法が現地化してフハテとなったことを知る私たちにとって、一見奇異に感じられるが、日本人が現地式の本釣り漁法を研究していたと想定すれば、あり得ることである。

ヨセフさんによれば、1940 年以前にシアウ島でカツオ一本釣り漁業が行われていた形跡はない。1942 年にシアウ島で生まれたヨセフさんは、中学生の頃に地元のカツオ船で経験を積んだというから、遅くとも 1955 年頃にはシアウ島でフナエ操業が行われていた。こうした状況から考えて、当時、ピトゥン近郊でカツオ漁業やその関連産業に従事していた人々が、シアウ島にカツオ一本釣り漁法

を持ち帰ったのではないかと想定される。

#### 4. 実証的研究の方法

上述の内容は、当該地域で聞き取った伝承とそれに基づく筆者の考察である。記録に残る資料が乏しい状況のなかで、いかにこれらの内容を実証していけばいいだろうか。ここでは、実証的研究のための方法論を列挙してみたい。

- ・ティドレ島のカツオ漁民がカツオ漁業を伝えたとされる地域を訪れ、その地域の伝承をできるかぎり収集する。スラウェシ北部のティドレ人集落では、住民が持つ氏族名の収集を行い、ティドレ島民の氏族名とのすり合わせを行うとともに、墓地の年代確認からティドレ人の移動年代を検証する。
- ・伝播地域の社会的背景と生態的特徴を比較し、フナエが展開するための条件を析出する。
- ・現在に残る表徴として、フナエ操業で用いられる用語や語彙を地域別に収集する。それらを比較検討して、地域間の関連性を考察する。
- ・これらの方法を総合し、伝承による“伝統的カツオ一本釣り漁業ティドレ島起源説”の妥当性を検証する。

(きたまど・ときお) (農林水産省国際農林水産業研究センター水産部)

#### 編集後記

金 14 万円也を支払って DTP (パソコンによるレイアウト) を学んだにもかかわらず使うチャンスに恵まれなかった私。このほど始めて紹介ページのレイアウトをまかされました。フォントや図とプリンターの関係や、タイポグラフィーなどわからないことも多く、たったあれだけに 2 カ月も掛かってしまいました。技術的にはまだまだ不十分ですが楽しかったです。「編集はいや、レイアウトだけしたい」と言う人の気持ちよくわかりました。(白蓋由喜)

私たちの調査研究は、主に、現場でカツオ・かつお節にたずさわっている人、たずさわっていた人に教えていただくことから成り立っています。そうしたみなさんへ、自分たちはこんなことをやっているんだ、というせめてものお返しがこのニューズレターです。年 2~3 回の割合で出していくつもりです。そして最後には研究成果を出版することを考えています。(宮内泰介)

カツカツ研は 1998 年 11 月より、トヨタ財団からの研究助成を受けています。